

「何でもありー！」  
は変わらなない

山田歌子さん

(大正十四年生まれの九十一歳)

喜多宗介さん

(昭和九年生まれの八十二歳)

ともに新宿に生まれ、

いまも新宿に深く関わる生粋の

新宿っ子。

そのお二人に、

関東大震災後、

急速に栄えた街の思い出、

いまの印象を聞いてみた。

炭屋さん栄えて新宿栄える

——中央線といえば、やはり新宿がシンボルだと思います。新宿あつての中央線、そういうと思うのですが、独特の文化を育み、それが沿線の文化に影響を与えたと思える新宿は、幼いころどう映っていましたか。

山田 父から聞いた話では、戦前、さらにその昔は、新宿よりもいまの四谷のほう为荣えていたそうです。あのあたりには花柳界があつて、新宿なんか問題にならないくらい賑やかだったそうです。

喜多 四谷見附あたりね。

山田 あそこには料亭があつたから芸者さんたちの花柳界があつて、当時の新宿は問題にならないくらいいいところだったんですって。

喜多 やっぱり新宿が栄えだしたのは、新宿駅ができてからでしょう。駅自体は明治時代からありますが、とくに新宿の東口が発展してきたのは昭和七年とか八年くらいだと思います。駅ができるずっと前は、東口よりも、ずっと西、成子坂のほうが発展していたそうです。当初、そのあたりに駅を整備するということだ

つたのですが、反対運動が起こって、それでいまの場所

に駅ができた。駅ができたことで、四谷側に当たる東口が発展していった。昔はそれだけ広い土地があつたということですね。

山田 新宿は早稲田大学から近いからか、記憶に強く残る光景といえば、やっぱり早稲田の学生さんかしら。正方形の四角いつばが頭に乘つたザブトン帽をかぶつた早稲田の学生さんがたくさんいましたよ。昔は学生服だったですから。特に野球の早慶戦なんかあると、大勢で新宿に繰り出してきましたね、一晩中、騒いでいましたね。甲州街道にかかる大ガード近くに小さな飲み屋さんが密集しているところで(現・思い出横町)、みんな朝まで騒いでましたよ。たまに慶應の学生さんなんかも見かけましたけど、隅っここのほうで小さくなって歩いていましたね(笑)。

——戦前の新宿駅周辺はどのような雰囲気だったのでしょうか。

喜多 いまの南口の高島屋があるあたりが貨物列車の停車場だったんです。そこに山梨や長野方面から荷物が届く。中央線で運ばれてくるわけです。それででしょうか、新宿駅の駅前には長野から届く炭を扱う炭屋

が多かったですね。

山田 うちはそのころ、貨物列車駅の近く、現在、スポーツ用品店「ヴィクトリア」がある場所で旅館を経営していたんですが、ずいぶんと山梨や長野からのお客様がお泊まりになりました。

喜多 うち(株式会社大阪屋商店)もそうだし、紀伊國屋書店さんもそうでしたが、とにかく炭屋がとても多かったですね。

山田 お客さんが山梨や長野から来ますでしょ。だから、戦争中の物がなかった時代にも、ずいぶんとお客さんからいろいろな山の幸をもらつて助かったのを覚えていてます。山梨の方は絹織物を商い、長野の方は炭を商っていましたね。新宿に出てきて、商談をして、また中央線で帰っていくんですね。

——長野から新宿に届いた炭を、炭屋さんが東京という大消費地でさばく。そういう意味で新宿は炭がつくった街といえるんですね。

喜多 そうかもしれません。戦前、東口が栄えてからは、神田から「ほてい屋百貨店」も新宿に移ってきましたんですよ。いまの伊勢丹の交差点の角、伊勢丹の横にあったんですよ。